

2023 年 7 月 18 日

早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター

早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター・1F 廃炉の先研究会
ふたば未来学園中学校・高等学校

第 6 回・1F 地域塾
議事録

開催日時：2023 年 5 月 20 日（土）13:00-18:05

会場：ふたば未来学園、Zoom ミーティング

参加者数：48 名（会場 45 名、オンライン 3 名）

総合司会：菅波香織・小磯匡大・横山和毅

ファシリテーター：田坂逸朗

プログラム

13:00-13:10 開催にあたって

松岡俊二（塾頭）

13:10-13:50 中学生・高校生セッション：海洋放出への意見や疑問・問いを語る場

司会：横山和毅

13:50-15:50 グループによる「対話の場」

進行：田坂逸朗・森口祐一・崎田裕子・井上 正

(10 分休憩)

16:00-17:55 総合討論

司会：菅波香織・小磯匡大

17:55-18:00 1F 地域塾の今後の予定など

松岡俊二（塾頭）

開催にあたって：

松岡（塾頭）：添付 PPT 資料参照

1. グループ報告 I

A グループ「人はほんとに不利益に対して冷静になれるのか？」

塾生：このテーマを選んだ理由は、廃炉や復興などについて自分が冷静にみられない側面もあるので皆さんの意見を聞いてみたいということだ。私みたいに冷静になれない人もいる。決定プロセスに対する不信感や不透明さから、結果よりもその形成過程に対する納得性を求めている。

不利益を被る側は、多分、少数派であり、冷静でない方がいい側面もあると思う。全てを肯定しすぎると、批判的な声が届きにくくなり、適切な対応策を考えにくくなる可能性がある。

小磯（副塾頭）：少数派に対して、多数派の方が冷静になりなさいということは二重の意味で暴力性を含むのではないかと。怨念や怒りを忘れず、冷静でなくても良いのではないかとという意見もあった。

B グループ「1F の現状を知ろうと興味を持ってもらうには？」

塾生：現状の伝え方として、福島で行われているツアーのような草の根の活動を通じて話した方が良いのかなと思う。身近な人々のルーツがここにあったり、友達の友達がいたりすることから、身近な繋がりが現状を伝えるきっかけになる可能性もある。

住民の気持ちが政治や制度に反映され、住民が地域のルール作りに参画できる成功体験が必要だという意見があった。

草の根の活動と上のルールを繋ぐところでメディアの役割が大きく、バイアスのかかった報道が情報を偏らせることがあるため、複数の意見を取り上げる工夫やバランスの取れた報道が求められる。東京電力の広報活動も住民に響かないことがあり、もっと住民の心に留められるようなアプローチが必要である。

私が神奈川県立の公立高校の教員のため、対象は学生に絞られても、発信という意味では教育の役割も大きいと思う。

塾生：対話をしていく中で、3年前の自分は興味も関心も持っていなかったことに気づいた。皆さんとの対話の間に自分の興味や関心を築いていっていることを感じた。

C グループ「情報過多で何の情報を信じて良いのかわからない」

塾生：世代によって、情報の接し方や媒体が違い、情報の偏りがある。若い世代はInstagramやTwitterなど SNS が主になるが、親世代と祖父母世代は新聞やテレビのニュースを主に利用している。

SNS で多くの情報が飛び交い、何を信用していいのかわからない。フォロワーが多い人が発信すると、その情報の信用度が急に高まることもあり、その場合、信頼性の偏りもあり、どの情報を信用していいかわからないという意見があった。福島県内でも原発に興味のない人も多いため、情報過多になる前に興味を持ってもらう必要があるとの意見もあった。

また、国外ではまだ福島原発事故の記憶にとらわれている国もあり、情報の更新が遅れているという問題もある。

情報過多の世の中で、物事を公平にみることが大切であり、自分の主観だけでなく、広い視野で様々な情報と向き合うことが必要である。間に人を通すことによって情報が変わってしまう難しさもあり、関係者から直接見聞きすることが必要だ。

D グループ「未来の選択肢を多様にするにはどうしたらいいのか？」

正岡：まず、未来の選択肢について、1F、浜通り、県、国など、どこから始めるべきかを話し合った。初めは幅広い範囲から始めることが良いという意見があった。

大人になると組織や役職があるので、選択肢を多様化するためには、若い人が意見を言いやすいようにした方が良い。そのため、若い人が言いやすい場を作るが大事だ。

家族や学校や社会で、真面目にこうしたテーマを考えるように社会構造を変えないと、選択肢に対応することは難しいとの指摘があった。一方で、選択肢を出す上で、少し先の目標が存在すると、参加者が具体的な提案をしやすくなるという意見もあった。

E グループ「科学的判断や安心や責任について」

井上(副塾頭)：過去の原子力事故により、原子力に対する不信感があるという意見が出た。事故によって環境が汚染され、さらに今タンクに貯まっているものを外に出すのは無責任ではないか。リスクの軽減は必要だが、専門家や関係者が安心を振りまくことは好ましくないと考える。海洋放出は無責任であり、適切に管理されるべきだ、倫理上や人権の問題を少し軽く考えすぎているように思う。もう一つは、環境汚染は将来の世代に負荷を残すについてどう考えるべきか。

または、東京電力は信用できなく、トリチウム以外のものも含まれるのではないか。第三者を介入させて測定する必要がある。トリチウムの放出は関係者の合意に基づくものだが、決定プロセスに問題がある。

最終的には、放射性物質だけでなく、化学物質（例：マイクロプラスチック）も地球環境を汚染している。その意味で、このような有毒で危険な物質を広げながら文明を発展させてきた。それは地球環境の問題だが、地球にとっては重要ではなく、人間環境の問題だ。

塾生：放射性物質は原則的に閉じ込めるべきであり、甘い評価で海洋に流すことは避けるべきだ。いつこの影響が出るのかは誰にも分からないので、放射線防護を考えないと間違ってしまう。私は基本的には貯めた汚染物質を流すことに賛成できない立場である被害者の意見を聞くべきであり、両方の立場の人が話し合う機会が必要だと思う。

F グループ「海洋放出以外の方法ってあるの？もう政府は決めているの？」

森口(副塾頭)：海洋放出するとしても何で福島海に出すのかという話をした。例えば、南太平洋に持って行って、捨ててはいけいないのか。今、除染土壌は関東地方に持って行って、活用する話があるが、処理水はそうできない。技術的にはパイプラインを通じて、福島県以外の海に流すことはできるが、福島県で起きたことから福島県の中で解決すべきと非難する方もいる。海に放出する以外に、大気放出や固化などは可能なのかという話もした。

誰がどのように決めたのかという話もあって、他の選択肢がある中で、海洋放出が選ばれた決定プロセスに疑問がある。科学的には放出先によって水循環は変わらないが、人々の受け止め方には影響する。そうすると目立たない場所に放出することが良いのではないかとの意見もある。

G グループ「賛成派は理屈、反対派はメンタル、それではいつまでもカミあわないのでは？」

塾生：海洋放出が本当に一番良い方法なのかへの疑問や賛成派と反対派が生まれる要因という話をした。今までなかった情報が出てきたり、出していなかった情報が少しずつ出てきたりすることがある。このような状況では、不信感を抱くことがある。東京電力が出している情報でも、検出限界値ということに関する知識がないとわからないことがある。また、元々の地域住民と新たな移住者という両方がいる中で、移住者は自分たちの地域を良くしてくれていると思うが、新住民への違和感があるという問題についても話しあった。

H グループ 「いろんなところで起きている賛成・反対の対立をどうするのか？」

塾生：期限が近づくと、一気に物事が決まるということがある。処理水を考えると、その期限があると何年間で処理するモデルなのかという議論がある。しかし、議論になる点が手段なのか、あるいは目的を決めるものなのかという段階や階層によって話が違うところがみえたのではないかな。

または、処理水のことを決めるメンバーは誰なのか、本当に国、東電、漁業者などだけで決めて良いのかという話があった。

賛成派と反対派のお互いに重なり合う部分を見つけ出し、多くの人が納得できる答えを探すための丁寧な「対話の場」をやり続けることが重要だ。

I グループ 「対話の先に合意形成はあるのか？」

塾生：処理水の海洋放出について決めるためには、対話をして合意形成をすることが大切という話はよく聞く。しかし、対話は単に決断を下すための手段ではない。それなら、処理水の海洋放出は最終的に結論を出すための議論に近いと思うが、なぜ対話が大事なのかについて疑問に思った。最近、よく使われるようになった「対話」という言葉だが、実は定義が曖昧で、議論など何らかの答えを必要とするものも含まれるため、何にでも使える便利な言葉になっている。

合意形成ができなくても、お互いに対話し、それぞれの意見や背景を共有することによって、例えば、自分が絶対に賛成できないことでも、この問題については何とかしなければならないと思えば、自分の中で物事を整理することができ、自分が納得できるプロセスにはなる。自分の納得は、例えば少数派の人が折れて仕方なく同意するのは違い、結果は同じでも、誰かに押し付けられたものではなく、自分が納得したものという点で違うのだと思った。

合意に関して、まず合意と同意の違いが、同意は個人の一对一のもの一方で、合意は集団によってなされるものであり、個人にとって仕方なくはならないところが集団で共有することによって、集団で納得できるかどうか意思決定の一つの基準だと考えた。そして、全てを合意しようではなく、いつでも決定を覆せる文面や暫定合意をすることが大事、暫定合意は先延ばしとみられることもあるが、一部合意ができたことを進歩と捉えるべきである。

「対話のOS」という言葉について、スマホの機種によるOSが違うように、違うOSで考えているからこそ、意見がかみ合わないこともある。対話をする間に、同じOSを使うことによって、それぞれ違うものを共有する姿勢が必要だと考えた。

塾生：誰でも思考の癖というものがある。例えば、相手をすぐ否定することがある。OSや機能の違いであつても、どちらが優れているとか、使い勝手が悪いとかを否定してしまうと、対話はうまくいかない。対話の中でお互いの共通言語を作ることが大事だ。

2. グループ報告 II

A グループ 「人はほんとに不利益に対して冷静になれるのか？」

塾生：今回の処理水のことや他の類似の出来事が起きる根底には、無批判に鵜呑みにしてきてしまうことにあるのではないかなという話が出た。同じ過ちを繰り返さないためには、何かを変えていかなければ

ならない。怒りや違和感といった感情が、変革を起こすエネルギーになる可能性がある。変えていくことの本当の意味を教育の現場で探求することは難しく、学びの中でどのように変革を進めていくのが課題である。

福田：処理水の放出のプロセスに関して、2年前に処理水の基本方針を決定する際、国は福島評議会といった自治体などの方々が入る場で説明し、意見をいただいたりといったプロセスを行い決めた。しかし、今日色々ご意見をいただいた中で、地元や地域の方々の声を決定の中で取り込むことの難しさを再認識した。国は処理水に関し、安全性や風評に対して万全を尽くすことになるが、地域の方々の決定をどのように踏まえるか、引き続き、地域の方々との対話が重要であると感じている。

B グループ「現状を知ろうと興味を持ってもらうには？」

岡崎：知らない人に、知っている人から言ってもらおうとすると、それはその人のエゴではないかという話が出た。例えば、全国の人や首都圏の人に福島の問題を知ってもらいたいとか、マスコミの報道が行き届いてないといった話があった。しかし、それはエゴではないかという話が出た。情報を知りたいタイミングが重要だ。タイミングについては運命みたいなものであり、たまたまこの仕事に就いたからということもある。こそういったことを人のネットワークで繋げていくのが良いのではないかと思う。

C グループ「情報過多で何の情報を信じていいのかわからない」

塾生：私達のグループでは、風評被害と海洋放出に関して、福島県の水産物に対する風評被害が発生する可能性があるとの意見が出た。宮城県沖や茨城県沖といった地域は、それほど風評被害は生じないという感じはしたが、福島県沖という言葉が風評被害を引き起こす可能性がある。国や関係者はこの問題を解決するために積極的な行動を取るべきだ。今後、韓国が視察に来るというニュースがあり、1Fと福島の実状について、包み隠さずに他の国々に情報を共有することが理解への第一歩であろう。最後に、日本人は情報を受身として捉えがちであり、自ら発言することを避け、対立や分断を避ける傾向があるとの意見もあった。

D グループ「未来の選択肢を多様にするにはどうしたら良いのか？」

塾生：情報に対して、選択肢を多様化することに対して、若い人の意見をどう捉えていくのかについて議論した。そのためには、大人は子供たちと同じ土俵に立って意見が聞けるかという話も出た。また、同じ情報でも認識が違うことがあり、対話を通じて解消しなければいけない。選択肢を増やすためには、特に若い人をいかに巻き込みながら、多様な意見を集約し、認識を共通化することが大事だと思う。お互いの感情を尊重しながら、意見を通じ合うことができる場をいかに作るべきかといった議論をした。

崎田(副塾頭)：将来の選択肢を多様化するとき、世代を超えて議論しなければならないという意見が出た。若い方にいろんなことを投げるだけではなくて、多様な意見に対応でき、一緒に生きていけるために、私達の大人世代が変わらなければいけない。その意味で、私達自身が社会変革に進むことが大事だという話が出た。もう一つは、多様な選択肢について話し、最後に合意形成ができるかどうか。合意形成は最後にできなくても、賛成と反対という多様な意見が存在し、対話を通じて納得できる状態はあるのではないか、その納得感をどこで出していくのかは対話にとっては大事だという話もあった。

F グループ「海洋放出以外の方法ってあるの？もう政府は決めているの？」

塾生：海洋放出のリスクの一番は風評被害だと思う。したがって、政府や東京電力は海洋放出をした後も責任があるし、もし自分がその立場にいた場合、どのように対処するのかを考えた。

森口(副塾頭)：過去のプロセスにおいて信頼を損なうような出来事があった、当事者はそのことに気付いていると思う。過去のプロセスに不適切なことがあった場合、それに対してきちんと対処しなければ次に進むことができない。

選択肢が存在する場合、最善の選択をしたかどうかは分からない。とにかく海洋放出を決めた、そうならざるを得ないと関係の皆さんは思っておられた。しかし一方で、海洋放出をしないという約束をしたら、汚染水はどうするのか、その話をしないとまずいのではないかという話があった。

G グループ「賛成派は理屈、反対派はメンタル、それではいつまでもカミあわないのでは？」

塾生：私達のグループの大事なキーワードは気持ちであった。避難を余儀なくされ、戻ってくるにも戻って来られなかったとか、戻ってきたら新しい人たちがいて、自分たちの地域ではなくなったために疎外感を感じ、それが善意であるとわかっていても、なかなか気持ちがついていかない。しかし、対話の存在によって徐々に変化していったというエピソードがここにはあった。

私は海洋放出に反対をされていて、いろんなことを言っても全然噛み合わないという感じがあって、信頼を損なうプロセスがあったということで、私の中にもそうした気持ちがあった。気持ちの問題はすごく大事だと話した。し

今の汚染水の問題においては、このプロセスと、そして、この夏に海洋放出が行われるという現実が、どうしても動かないと感じられて、こんな動かない中で、こうした問題が見えてきたとしても、どうすれば良いのかということについては、良い意見はなかった。

塾生：海洋放出の決定をもう変えられない現実に対して、どう対処するか。それが一つのゴールかもしれないが、それが最終ゴールではないだろうという話があった。地域をより良くすることは、もっと先にあるゴールかもしれない。海洋放出が決まっても、未来をより良くする方向に向けて進むために、途中からサーキットに乗り込み、対策を積み重ね、回り続けることが大事ではないか。

H グループ「いろんなところで起きている賛成・反対の対立をどうするのか？」

塾生：私達のグループは、各グループの発表が全体的な概要であったので、その認識の擦り合わせみたいなところで、この5分間を使ったような気がした。特に私が興味を持ったのは、対話の先に合意形成はあるのかというところで、汚染水の話だけではなく、他のことでも対話すれば必ず合意形成となるわけではない。テーゼがあって、アンチテーゼがあってジンテーゼがあつてみたいのが理想だろうが、どれも全てそのように上手くいかないという話がちょっと刺さったところである。

I グループ「対話の先に合意形成はあるか？」

塾生：私的に興味を持ったのは、ホワイトボードでは4つの観点にわかれていたが、漏れる部分はないのかと思った。ここにいる人の考えでこの4つの観点が置かれた。しかし、ここにはいない人はどんな論点を持つのかというのが気になった。

3. 自由発言

力丸: メディアが特に何かを教えてくれるという存在ではなくて、私としては記事を書くときに、皆さんがディスカッションの材料にしてくれるような問題提起をしたいと考えている。そのため、記者もあえて挑戦的なことを書いて、チャレンジングなことをしていきたいと思う。

今氏: ドキュメンタリー番組の制作を担当している。去年の6月に最高裁で、国に原発事故の責任はないという判決が出て、それを市民の方々と対話を通して、その意味やそれをどう受け止めたら良いのかについての番組を作っている。

対話の場は、みんながそれを自由に使えるみたいな公共的な場所である。情報を伝えるメディアも、本来、公共的な認識場所である。言いたいことは、皆さんの意見や聞きたいこと、メディアにしてみたいなことなどをどんどん言っていただきたいと思う。対話的に情報をもっと考えて、アクションできたら面白いと今日は思った。

溝上: 健康に影響がない前提で、こっそり流した場合には、風評被害が起こらなくなる可能性があるという話が出た。福島の方からみると、宮城の魚は宮城県だから何もないと扱われていて、逆に言うと福島側に負担を強いているような状況になっていると思う。その意味で、メディアの方は、先ほどディスカッションの材料にしてほしいという話は当然ありながらも、拾えてない部分もあると思う。ここのグループでは、その間に人が入るから、バイアスがかかることも当然あるという話が出た。バイアスがかかるのは悪いことではない、しかし、情報過多な状況になる中で、小さいことから排除して、目指すところだけ報道すると、場合によってはいろいろなところに負担が出て、全体最適から遠ざかる可能性があるかもしれないと思う。

新妻: 福島の漁業者は、処理水によって魚が汚染されるとは思っていない。震災後1ヶ月経ったときに、1Fの先の海では1mL当たり6500ベクレルという状況だったが、40キロから60キロぐらいの沖で測定したら、1000分の1ぐらいになった。その意味では、太平洋の海は綺麗にする力があるとのことで、科学的には今回のALPS処理水がどうなるかに対しては心配をしていない。

風評被害とボタンの掛け違いの部分が一番大きい。風評被害に関しては、価値観や環境や家族構成によって風評に対する判断は全然違う。線量が基準値を超えていないなら問題ないという考え方もあり、基準値を超えると全ての魚に影響があると思う人もいる。風評を払拭する効果があるのは時間経過以外にはないのかなと思う。

漁業者は、地下水バイパスとサブドレンの海洋投棄について、断腸の思いで引き受けた。熊川、富岡川、その辺の川と同レベルの放射線量の水を1F敷地内から海洋に捨てることを同意しなければ、敷地内80万トンの処理水タンクしか置けないので、大変なことになりかねないので、私たち漁業者は引き受けた。時間が経って120万トンまで敷地内に置けるようになった。当時、県漁連から提出された要望書に対する東京電力の回答は、漁業者や関係者の理解を得ずにALPS処理水を捨てることはないということだった。漁業者の立場として一番気に入らないのは、このボタンの掛け違いである。この点について明確な説明がないまま進めていることに納得ができない。

個人的な意見としては、大気中に水蒸気で放出することがベストだと思う。冬場の北西風が強い時に、蒸発をさして海側に出して捨てるようなやり方ができれば、飯館や向こうの人たちが大変な思いをしたことにも、何らかコミットできるのではないかということを考える。

小磯(副塾頭): モヤモヤし続けることが私の目的だったというか、モヤモヤのままで耐える力や立ち向かう力を考えさせられる時間だった。

崎田(副塾頭): この問題を立場が違う皆さんと一緒に考えて、この場で共有するのが大事なことだと思う。今日は中高生や地域の皆さんからどんどん話を聞くことができ、本当に素晴らしい流れだった。実は、私も市民の立場から ALPS 小委員会に参加し、市民として、地域住民の声を皆さんで共有しながら、しっかりとした判断を政府に求めてきた。その意味では、政府は市民の意見を聞きながら事業を進めてきたし、地域での公聴会も開催してきたが、本当に地域の方が納得するコミュニケーションという状態には至っていない。今後の処理水や廃炉全体の議論につながれば良いと思う。

森口(副塾頭): 新妻さんが最後にしか参加できなかったのは残念だが、漁師として科学的なところは心配していないし、大気放出が良いと思うという発言だったので、ここで一緒に議論できればもっと盛り上がっただろう。私は大気の専門家であり、1F 事故直後の拡散シミュレーションに関わってきて、北西風の時にどうなるのかがわかる。今からでも北西風の時に蒸発放出した方が良いのではないかという議論をさせてもらえることを期待したい。しかし、大気に出しても海に落ちる。大気に放出すると農地に落ちてしまうので、農業者から反対されるかもしれない。そういった議論を尽くした上で、海に放出することに対する納得感の持てるプロセスが、今からでも間に合うようだったら考えてほしいなと思いながら、この時間を過ごした。

【会場の様子】



